

蘇原能 三番目

しま ぎき ざくら  
島崎 桜

素材 農民一揆によって引き裂かれる若き男女

主題 離別の苦しみを通して成長する男と女

人物 シテ 美代 (村娘)

ツレ 般若 (心の影)

ワキ 彦作 (義民となる若者)

場面 一、文政十二年二月二十九日の朝、島崎村の藁小屋

二、同年四月二日夜中、美代の寢所。

三、同年七月二日昼、鵜沼宿。

場面一 文政十二年二月二十九日の朝、島崎村の藁小屋

### 1. 美代

〔次第〕散りてこそ 色あでやかに 実を結ぶ

鄙びた里の 桜木が

〔名乗り〕これは美濃の国、各務野蘇原郷、島崎村なる里の村娘に  
て 名を美代と申し候。

### 2. 地謡

固く契りを 交わした人が 死地に旅立つ 日が昇る  
恨みに想う 朝鳥の声。

### 3. 彦作

〔名乗り〕これは江戸へ越訴の出府人にて 名を彦作と申し候。  
露深し 緑目に沁む 麦畑に ただ俯いて 別れかな。

### 4. 美代

何でお前が 行かねばならぬ。

5. 地謡

山の端はに 下弦かげんの月が 落ちてゆく。闇やみが深まる 春の朝かな。

6. 彦作

村のためじゃ 決きまったことじゃ。

7. 地謡

一たび舟の 人となり 三途さんずの川を 渡るなら

二度とは会あえぬ その人に

言ぎえた義理では ないけれど

春とは言いえど まだ寒い、

霜に負けずに 達たっしや者でな。

8. 美代

村のためとは 身みがって勝手な。

9. 地謡

己おのが功名こうみやう 立てるため、渡しの舟の 人となり

江戸へ越おっそ訴そに 行くという。愛いとしく思いえば 恨うらめしい。

10. 彦作

胸に手を当て 思かえうとき、返かえす言葉が どこにもない。

11. 地謡

己おのが功名こうみやう 立てるため、女の心こころを 踏ふみにじる  
勝か手てな男おとこと 人ひとは言いう。

春は荒れ地に 鋤くわを打ち、夏は泥田どろたで 草かを搔かく。

秋は千齒せんばで 糶もみを扱こき、冬は夜鍋よなべで 藁わらを打うつ。

朝から晩まで 働はたらけど ひもじい思いいで 水みづを飲のむ。

この上そなたを 娶りても 辛い思いを させるだけ。  
重き年貢の その上に たび重なりし 御用金。  
何も残らぬ ご時世に、せめてその名を 残したし。

## 12. 美代

勝手な男の 言い草も、私が聴かねば 誰が聴こう。

## 13. 地謡

富も名もなき その身でも 命があれば 花が咲く。  
踏みにじられる 草木にも 天道様の 慈悲がある。

## 14. 彦作

口惜しいのじゃ！

## 15. 地謡

重き年貢の その上に 御用金まで 課しながら、  
破れた堤も 直さずに 武家の贅沢 守るため  
骨身を削る 百姓の 五分の魂 ここにあり。

## 16. 美代

堪えて下され 一時を。

## 17. 地謡

怒りにまかせて 物いえば  
非道無慈悲な 侍が 十手捕縄 手鎖で  
縁者を捕らえて 傷めます。

困窮難渋 極まりて 笑止の日々を送るのみ。

## 18. 彦作

もはや後へは 引けはせぬ。

## 19. 地謡

野口の衆はもうすでに 宗佐衛門の 呼び出しに  
断り状を送りたり。もはや猶予は なかりけり。  
直訴駕籠訴は 重い罪、訴え出たる 者どもは、  
三途の川の 渡り舟 仏の眠る 木曾川を  
越えればそこは 尾張なり。

※ 代官所の佐々木宗佐衛門は渡り待であり、出世のためには無慈悲道をものともし  
ない男であった。・木曾川の渡しのほとりに寝仏山がある。

## 20. 美代

今は春 死に急いでは なりませぬ。

## 21 地謡

法永寺の 桜の木 花を咲かせる その時に、  
愛でてくださる 人もなく。  
酒に酔いたる 男らが 淫らなその眼で 眺めれば  
花も哀れに ございます。

## 22・彦作

何も悲しむ ことはない。

## 23・地謡

桜の花の その下の 地藏菩薩が 見てござる。  
オンカカ カビサンマ エイソワカ。 (地藏菩薩の真言)  
大地は命の みなもとじゃ、全ての子ども 守り神。

## 24・彦作

わしの心は そこに在る。

場面二 文政十二年四月二日夜中、美代の寢所

※ この日、彦作は大老水野出羽守に駕籠訴を決行し、徳山本家に送られて拷問を受ける。

25・美代

胸が騒ぎさわて 目が醒さめる。彦作殿が 往ゆかれたか。

26・地謡

もしやと思みい 身を起みこす。

もはや会あえぬと 思あうとき 恋うらしい思あいが 恨うらみに変わる。

恨うらみ深こきは 功こう名み心しん、 憎にくきは男おとこの 勇いさみ肌む。

そほこに惚ほれたる 女おんなの一いち途ず 恨うらめばなお増ぞす 恋こ心こころ。

27・般若

色しき即そく是ぜ空くう 空くう即そく是ぜ色しき 受じゆ想そう行ぎ識しき 亦やく復ぶ如に是よぜ

28・美代

暗くら闇やみに 鋭まく光なる 眼まな差さしの そまなたは 一いっ体たい 何なに者ものじや。

そおその恐おそろしき 鬼き女じよの顔かほ。

29・般若

今いまさら驚おどく ことこともななかろう。鏡かがみに映うつりし そまなたなり。

30・地謡

死しして往ゆきても 悲かなしままず。

生かえきて還かえりて 喜よろこばまず。

五ご蘊うん一いつ切さい 空くうにして 時ときを迎むかえる 覚さ悟ごなり。

31・美代

夜よ桜ざくらに 浮あき出でて淡あき 望もち月づきの。

32・地謡

一日千秋過ぎ去りて

時は卯月うづきとなりぬれば、

寺の桜も 咲さきにけり。

春の夜長の 徒花あだばなは

愛めでる人なく 散り果てる。

恨うらみに想うう その人の、

落花狼藉らっかつかるうぜき 許すまじ!

※ シテが花吹雪の中で乱舞する。

### 場面三 文政十二年七月二日昼、鵜沼宿。

※ 江戸への越訴が成功して、一行が鵜沼宿に復かえつて来る。

### 33・美代

ここは美濃の国 鵜沼宿うぬまじゆくにて候。

江戸へ越訴こつの 功成りて 渡しの舟が 着きにけり。

### 34・地謡

舟から降りる その人は、島崎村の 儀助ぎすけ殿、

野口村の兼蔵かねぞう殿 同じく九兵衛きゅうべえ殿に金左衛門きんざえもん殿

見慣れた顔の その中に ただ俯うつぶいて やつれたる

変はわり果てたる 姿あり。

### 35・美代

別れる時も 俯うつぶいて また会あう時も 俯うつぶいて

### 36・地謡

藤の花かと 紛まじうほど 紫色に 変わりたる

顔の打ち身うが いたわしい。

徳山本家の 拷問ごうもんに 耐え永ながらえて 今ここに  
足を引ひきずり たどり着く 山のような 人がおり。

※ 「藤の花ただうつぶいて別れかな」(越人)

### 37・彦作

瘦やせこけた 小さな体の この俺おれが 山に見えるか そなたには。

### 38・美代

遠く大きな その人の 私の及およばぬ 姿すがたなり。

### 39・地謡

死して往ゆきても 悲しまず。生きて還かえりて 喜ばず。

心を決めた その身にも 露したたが滴り 玉となり、

連山影れんざんを 正しうす。

※ 往還二回向である。「芋の露連山影を正しうす」(飯田蛇笏)というように、身分の低い身近なものにも高貴で偉大なものが宿り、心豊かで謙虚なものにはそれが見えるのである。

### 40・彦作

心得た。 そなたはもはや 儂わしのものではない。

儂わしももはや そなたのものではない。

### 41・地謡

山と桜さくらが 手を取りて ともに世のため 人のため

菩薩ぼさつの道を 歩むべし。

### 42・美代

菩薩といえは 懐かしい お地藏様と 馬頭様

### 43・地謡

満開の 桜の下に 道祖神どうそじん。

島崎村の 辻つじに立ち 迷える女子を 導いて

操を固く守らせよ。

※ エゴが浄化されて社会化されていく、これを菩薩道という。

#### 44・美代

三面八臂の その姿 憤怒の顔が よく似合う。

#### 45・彦作

気丈なそなたの ことなれど 柔和な顔も よく似合う。

#### 46・一同

オン アミリト ドハンバ ウンハッタ ソワカ。

オン アミリト ドハンバ ウンハッタ ソワカ。

(馬頭観音の真言)

大慈大悲の本誓は 世間の音を 観照し、

生老病死の 苦しみを 寄り添いながら 受け容れる。

大慈大悲の本誓は 衆生の声を 聴き分けて、

戦と重税 無くすため 天下の政道 糺すなり。

完

※ 岐阜県各務原市蘇原島崎町4丁目にある法永寺には、今も桜の老木がある。その東には地藏菩薩があつて老木を見守っている。その北西にある三ツ辻正面には馬頭観音があり、道行く人を導いている。地藏菩薩は彦作の、馬頭観音は美代の化身である。

おおほり ひとし  
大堀 一志 伝  
てらだ せいち  
寺田 誠知 記